

## 「“本気”の二文字から」 (岩井淳子)

[おすすめしたい本：宮下奈都『神さまたちの遊ぶ庭』]

「どんな本でもその中に必ず、今の自分が必要としている言葉がある。あるいは逆で、人はどんな本からでも、自分に今必要な言葉を見つけられるのかもしれない。」これは最近読んだ本の中に書かれていた、胸にコツンと響いたひと言。

私が今、おすすめの本からその「言葉」を取り出すならば、“本気”という二文字にしようと思う。

一番近いスーパーが三十七キロ山道を下った先、冬にはまつ毛はおろかコンタクトレンズまで凍り、庭先にはエゾシカが立ち寄りクマの気配までも…。一年間、山村留学で北海道トムラウシの地に暮らした作家の宮下奈都ファミリーの、日々を描いたエッセイ。

宮下さん曰く「行くと決めたのだから、楽しもう。無理にそう思うより先に、楽しいに違いない、という気持ちのほうがどんどん強くなっていった。」

言葉通り著者を始め夫・三人の子どもたちはここでの生活を心底楽しむ。その様子はツッコミどころ満載で、一ページ読む中に何回ニヤリとし、フッフツと声が漏れることか。

でもそれだけじゃない！長男十四歳に「ここトムラウシで、今日も本気の大人たちをたくさん見ました。本気の大人ってカッコいいです」と言わしめ、地域の人たちや先生、親兄弟、周りのありとあらゆるものが、厳しく、優しく、明るく“本気”でつながる姿には、こっちまで心が熱くなっていく。

何度も読み返し、次にどう事が進むのか、文脈もよくよく承知なのに、読むたび新しい“本気”に出合える本なのだ。

山の麓の町には、小さな本屋さんが一軒。

「いつかこの本屋さんに私の本が置いてあったらうれしいだろうなあとしみじみ妄想する」と書いた宮下さん。後日、この野望が叶うことに…。本屋大賞受賞作「羊と鋼の森」はこの地で執筆していたという、なんとも心惹かれるエピソードではありませんか？